

# 石垣島川平の儀礼における歌・唱え言・発話

— 習得過程での関連付け、実践をめぐる対照性と共通性に着目して —

澤井 真代

## 一・儀礼におけることばの背景への視点

奄美、沖縄、宮古、八重山の島々を含む琉球諸島の各集落では年間にわたり、農作物の豊作や、豊漁、住民の健康などを祈願する儀礼が行なわれ、それらの儀礼では様々な歌や唱え言が発せられることが知られている。特に八重山の諸集落の事例を対象に、儀礼過程の展開に沿って唱えられ、歌われる歌謡を検討した波照間永吉は、集落の儀礼のなかに歌謡がその構成要素の一つとして「嵌め込まれ、機能している」(波照間一九九六…三〇七)と指摘し、儀礼と歌謡の強い結びつきを説いている。こうした見解は、歌謡の「生態的な有り方」(波照間一九九三…七六)の記述を旨指した『沖縄の神歌』<sup>1)</sup>の編纂作業に生かされている。『沖縄の神歌』においては、琉球諸島各地の調査対象集落における一つずつの儀礼について、そこで歌われる歌謡の「歌詞」歌謡に伴う儀礼的所作「歌形」「歌唱法」「儀礼過程」「歌謡目

録(歌謡名、歌唱主体、歌形、歌唱法についての目録)がまとめられている。このように、儀礼過程に注意を払った詳細な観点からの、琉球諸島全域の儀礼における歌謡についての記録である『沖縄の神歌』は、儀礼及び儀礼における歌謡が多くの場合衰退に向かつて変化しつつある今日、その重要性を増している。

こうした先行研究に負いながら筆者は、儀礼の場で起こる事柄自体の分析や記述にとどまらず、ある事柄が儀礼の場で起こるに至る背景や、起こることを可能にする背景へと、考察をすすめてみたい。すなわち、儀礼の場における歌謡の歌詞や歌い方といったことだけでなく、あることばが儀礼の場で発せられるようになるまでの担い手の習得過程や、ことばをめぐる人々の知識の偏在と遍在の様相を含めて、ことばを捉えようとする。以上をふまえ本稿では、八重山諸島石垣島川平集落の儀礼における歌・唱え言・発話を対象に、まず一儀礼におけることばの継起の概要を提示し、続いてそれらのことばと他の儀礼におけることばとの関係について、担い手の習得における関連付

くと、実践に見られる対照性・共通性を指摘する。

なお本稿では「歌」「唱え言」「発話」について次のように考えている。「歌」や「唱え言」は音楽的側面から日常的発話と異なる特質を指摘できるものと捉える<sup>(3)</sup>。これに対し筆者が石垣島川平の事例に即して対象化した「発話」<sup>(4)</sup>は、祈願の前後に神役同士で、あるいは神役から一般の儀礼参加者に向けて、また人から神に向けて、敬語を多用する川平方言<sup>(5)</sup>で挨拶、ねぎらい、連絡などの内容をもって述べられることばで、日常的な発話に比べて言語コードの面で特殊性をもつ。

この発話によって述べるべきことは概ね決まっており、この発話に特有の表現もいくつかあるが、基本的には場に応じて発話者なりのことばが述べられる。ただ、方言をできない人が発話をする立場になると、方言のできる年輩者に習った通りの発話を行なうことが多く、近年は発話が固定化する傾向にある。しかしいずれにしても、敬語を多用する川平方言による発話は、川平における儀礼の特定の場面で要請され、儀礼過程を構成する一要素となっている。本稿ではこのような発話を、歌・唱え言とともに儀礼の場におけることばとして検討していく。

## 二・石垣島川平の神役と年間の儀礼

川平集落は、八重山諸島の行政・交通上の要衝である石垣島南部地域から、北西に約一八キロの地点、川平半島中部にあ

る。石垣市の統計による川平集落の人口は三六九世帯七四一人（二〇〇六年十二月現在）で、農業、観光業、食品加工業などが営まれるほか、最近では島の南部地域へ賃金労働者として働きに通う人も多い。週休二日制で働く人の増加により、旧暦と十干十二支で日が取られて行なわれる年間二六回の儀礼の遂行は年を追って困難を増しているが、神役を中心に現在まで、人々の生活の多くの部分を割いて儀礼は続けられている<sup>(6)</sup>。

儀礼における祈願を中心的に担うのは、集落の四箇所<sup>(7)</sup>の拜所「オン（御嶽、*on*）」に一人ずつ就いている、四人の女性神役「ツカサ（司、*tsukasa*）」である。ツカサを輩出する系譜は主に各オンの由来伝承との関わりで限定される<sup>(8)</sup>。

四つのオンにはそれぞれ、オンの管理に中心的にあたる「カンムトゥヤー（神元家、*kannmujia*）」と呼ばれる家が決まっており、カンムトゥヤーの当主が代々、「カンマンガ」（*kannmanga*）の役を勤め、各オンに基本的に家ごとに帰属する「イビニンジュ（イビ人数、*ibinjinju*）」<sup>(9)</sup>をまとめている。

各オンのイビニンジュからは、毎年、儀礼で用いる祭具や供物を準備、設置するなどし、ツカサに祈願を依頼する役を負う男性として「スーダイ（総代、*sudai*）」一人と、スーダイを補助する「ムラブサ（村補佐、*murabusa*）」一人が選出される。

以上のオンに帰属する神役のほか、年の変わり目の儀礼「節祭（*tsai*）」において来訪神「マユンガナシ（真世加那志、*mayuganashi*）」に成り代わり、家々を訪問し、新年の予祝を主な

内容とする唱え言を唱える男性神役が、川平の「上の村」と「下の村」に、それぞれ四組八人ほどいる。<sup>(11)</sup>

こうした神役組織によって行なわれる年間二六回の儀礼の主軸は作物の播種から収穫までの生長段階に応じて、神に農作業の状況を報告し、今後の成功を願い、もたらされた成功に対して感謝するというものである。それらのなかにはツカサによる祈願のみで構成されるものもあるが、集落の様々な立場の人が参加するものも少なくない。次節では、集落の多くの人が参加する儀礼の一つ、米の収穫感謝儀礼「豊年祭 (puhi)」の大きな過程と、そこで様々な立場の人が担うことばを見ていく。<sup>(12)</sup>

### 三・豊年祭における歌・唱え言・発話の継起

川平の豊年祭は午前中の「朝参り」と午後の「プバナアギ (穂花上げ、pubana'agi)」から成る。

朝参りは、ツカサ四人、スーダイ四人、「ウヤジュウ (Quidju)」と呼ばれる六十五歳以上の男性一〇〜二〇人が四つのオンを巡って祈願を行なうもので、参加者達は朝七時前後に集落のほどこに位置する「宮鳥オン (mijiduri'on)」に集まる。

オンは、出入り口に鳥居があり、入ると木々が鬱蒼と周囲を取り囲む中に、まず「オンヤー (御嶽家、o' nja)」と呼ばれる、祭具などを保管する小屋があり、さらに奥にはオンの中でも通常ツカサしか入ることのできない空間「ウブ (ubu)」がある。ウ

ブは、中央に一〜二人の人が頭をかかめて通り抜けるくらいの空間が作られた石垣で仕切られており、朝参りに集まった人々はまず敬語で丁寧な挨拶を交わした後、宮鳥オンのこの石垣の前に敷かれた筵上に座って談笑しながら出立の時間を待つ。

参加者がだいたい集まると、ツカサはスーダイ達と一礼し合い短い挨拶のことばを交わしてから、祈願の時のみ身に着ける、白くて足元まで届く丈の羽織、「神衣装 (カンイショウ)」を着物の上に羽織る。<sup>(13)</sup> 続いてスーダイの長を勤める男性が、皆に向かって川平方言の敬語により出立を促すと、全員立ち上がり、集落で最も位の高いとされる群星オンに歩いて向かう。

群星オンに着くと全員で祈願の場を整え、八時頃にツカサ達はウブ前の筵上でスーダイ達と一礼した後、供物を持ってウブの中に入る。

群星オンにおいては同オンのツカサが香をたき供物を上げて神への唱え言「カンフツ (神口、kangutsi)」<sup>(15)</sup>を唱える。このカンフツはスーダイら他の儀礼参加者とは石垣で仕切られ数メートル離れたウブ内で、神の方を向くためにスーダイ達に背を向けて唱えるうえ、その唱える声は本人にししか聞こえない程のきわめて小さなささやき声であるため、儀礼の場でツカサ以外の人に聞かれることはない。

さらにカンフツは、筆記や、ツカサ以外の人への他言が禁じられているだけでなく、習得の過程や練習の場も他者に閉ざされている。以上のように儀礼の場の内外におけるいくつもの条

件から、カンフツについての知識は集落のなかでも四人のツカサと、ツカサ経験者のみに厳しく限られている。

ただ、儀礼の場で唱えられるカンフツの展開に沿ってスーダイ達に求められる所作や態度があるため、スーダイ達もカンフツの大まかな展開をある程度把握していると考えられる。たとえば、冒頭に神の名ーミョーツ(名字, *miotsi*)とパカーラ(*pakara*)<sup>(16)</sup>ーを唱え上げる「案内(*pusukai*)」の次の、神への「挨拶」の時は、ツカサ以外の儀礼参加者が誰であるかを神に伝えるので、ツカサは振り向いてスーダイ達に合図を送り、スーダイ達は正座をして居ずまいをただし、手を合わせる。また、続いてツカサは当該儀礼における祈願の具体的内容をもつカンフツを唱えた後、この度の祈願が神に通るように、座ったまま腰をかかめての「パイ(拜, *pai*)」と呼ばれる所作をするが、この時も事前にツカサはスーダイ達のほうへ合図を送る。するとスーダイ達は、その場で立ったり座ったりを繰り返しながら手を合わせるパイを行なう。<sup>(18)</sup>

パイが終わると、ツカサは米一粒を供物の「サンダイ(*sandai*)」〔お下がり〕の意)として結った髪の毛の中に入れ、最後に願いが神に通ったかどうかをみる米占い、「フカツ(*fukatsu*)」を行ない、神に最後の挨拶をしてから、供物を持ってウブの外に出て、スーダイ四人と向かい合って座り、互いにお辞儀をし、祈願に用いた泡盛を順番に飲む。

以上を終えてその場を片付け、一行は次の山川オンへ向かう。

どのオンでも、先の一連の手順で祈願を行なう。宮鳥オンでの祈願を経て、最後の浜崎オンでは、祈願終了後にツカサとスーダイにまわされた泡盛がウヤジユウ達へもまわされ、続いて、米で作った白濁の神酒「ミシヤグ(*misjagu*)」も、ツカサから順に全員へまわされる。

その後、敬語を多用する川平方言による発話の応酬が続く。まず、スーダイ長が群星オンのツカサに朝参りの祈願についてお礼を言い、群星オンツカサからスーダイ長へもお礼が述べられる。次に群星オンツカサが参加者全員に対してお礼を述べ、ウヤジユウの一人が全員に対してお礼を述べ、スーダイ長が全員に対して次のようなお礼を述べる。<sup>(19)</sup>

*nigabnumai bigidug ?ujadgu:nukata kijunu ?idajia maidan*  
*sidigafuju: kutusinu pubana ?agi pinitish hatari orrideri kijuja*  
*jujananu kannumainu ?oruru katana ?indziju ?agitorri maidan*  
*sidigafuju: ?indzinnu tukug nigainu tukug ?arashinn tororideri*  
*kabiramurunu ?uiheja mirukuju: ?ujakijuba ?umukai smi*  
*jurukubasini toketedi ?umoriju (願い部「ツカサ」の前「敬*  
*称」、男の先輩方、今日の次第は、まことにありがとうござい*  
*ました。今年の穂花上げ「豊年祭」の日にちに当たられ、今*  
*日は四ヤマ「四つのオン」の神さまのいらっしやるところで、*  
*神事を上げくださり、まことにありがとうございました。神*  
*事の徳、願いの徳をあらしめてくださいますように、川平村*

の上へ、弥勒世、ウヤキ「富裕」世をば、お迎えさせて喜ばせてくださいと思います。

この発話の「神事の徳、願いの徳」以後最後までのごとくは、こうした儀礼の場における人から人への発話に必ずといっていいほど出てくるだけでなく、各家における火の神への祈りなど、人から神へのごとくにも頻出する。

以上をもつて、だいたい午前十一時頃に朝参りは解散となり、皆一旦自宅に戻る。

午後のバナアギは、四つのオンにそれぞれの帰属神役とイビニンジュが集まって行なう。以下では、群星オンにおけるバナアギの概要を見ていく。<sup>(20)</sup>

群星オンに参加者が集まり始めるのは十三時半頃だが、ツカサは十三時頃にティナラビを伴って一回目の祈願を始める。この時は豊年祭にあたって神に奉納するために住民から集められた「神上納 (Kamijonon)」について神に報告する。十四時過ぎに行なわれる二回目の祈願「バナアギ」では、イビニンジュが持参した米及び芭蕉の葉に包んだ餅を、神に上げる。十五時過ぎの三回目の祈願「タティニガイ (tamigai)」では、来年のさらなる豊作が祈願される。

以上三回の祈願は朝参りにおける祈願とほぼ同様の手順により、ウブの外ではカンマンガールとウヤジュウの男性達もバイを上げる。また以上三回の祈願は、四つのオン全てで共通する。

この三回の祈願が終わると参加者達は供物のお下がりでの宴に入るが、ツカサだけは、宴に参加しながらもしばしば一人でウブに入り、カンフツと同じような小さな声によることばによって神に儀礼過程を報告する。たとえば群星オンでは、ツカサ、ティナラビ計二人の女性と、カンマンガールとウヤジュウ計二人の男性に対して、イビニンジュから選ばれた男性二人が「フミシヤグ (fumijagu)」を歌いながら、次に女性二人が「ミシヤグ」を歌いながらミシヤグを献上する儀礼過程「ミシヤグアギ (神酒上げ, mijagu agi)」があるが、ツカサはこれに先立ってウブに入り、これからミシヤグアギが始まることを神に報告する。また続いて老若男女のイビニンジュにより、三線の伴奏で歌や踊りが披露されるが、ツカサはこれについてもウブに入り神に報告する。この時のツカサから神へのごとくは唱え言としてのカンフツではないと言われ、敬語を多用する川平方言による神への話しかけ(発話)であると考えられる。

十六時半が過ぎてオンでのバナアギが終了すると、続いてオンのすぐ外で、群星オンの鳥居の斜め前から望む山「マイビル (maibiru)」に対し、ツカサ、ティナラビ、スーダイ、カンマンガール、ウヤジュウ達によって朝参りの祈願と同様の手順で祈願が行なわれる。終了後、ツカサと、マイビルの願いに参加した男性神役及びウヤジュウ達は、銅鑼と太鼓を鳴らし「アガルカラ (hakurikara)」を歌いながら、マイビルの願いで香を立てるために盛った砂山の周りを、ツカサを先頭に三〜五周ほど周り、

そのまま群星オンのカンムトゥヤーまで歩いていく。カンムトゥヤーの庭では皆で円状に歩きながら「チクイディヌパツイムヌ (stskuidinupatsimnu)」を歌い、最後は「ピキバ (pikha)」を歌う。<sup>(23)</sup>一同はカンムトゥヤーの座敷に上がり、そこでツカサによる締めくくりの祈願を行なつてから、宴をもよおす。

#### 四・習得と実践における関連付け・対照性・共通性

##### (1) 担い手の習得過程におけることば相互の関連付け

##### ① 歌の担い手

前節で見た豊年祭におけることばのうち、ツカサのカンフツやスーダイ長による発話は、特定の社会的立場に伴つて習得と実践の責任が生じるというものであるが、歌の担い手による歌は、やや背景が異なる。

まず、ミシヤゲアギの歌を担う女性の一人(一九三六年生)について見てみたい。<sup>(24)</sup>この女性はもともと歌が好きで、子どもの頃から、田の草取りをしながら先輩達が歌う川平の歌を聞き覚えていたが、中学を卒業してから結婚するまでは、当時隆盛になつた「歌謡曲」や「流行歌」に夢中だつた。しかし、二十三歳で嫁いだ年から、川平の歌に詳しくて後に「川平ジラバ保存会」<sup>(25)</sup>を組織する年配の男性と家が近所になり、歌声を見込まれ、豊年祭など歌のある儀礼の前には必ず家まで来たその男性に、口から口に歌を教え込まれたという。この女性は現在

に至るまで、豊年祭以外の儀礼においても歌を担い、また歌の先導役をまかされている。

このようにミシヤゲアギの歌は素質の見込まれた人が習得を開始するのに対し、豊年祭の最後に道歌として歌われる「アガルカーラ」などは、かつては、豊年祭に向けた準備や打ち合わせのためのイビニンジュごとの集まりで、必ず最初に全員で練習したという。<sup>(26)</sup>この集まりには、イビニンジュのうち「青年から年寄りまで」、すなわち「青年会」所属の年齢以上<sup>(27)</sup>の男性が参加したという。

##### ② 豊年祭の歌の習得と、マユンガナシのカンフツの習得

豊年祭の打ち合わせに参加して道歌を練習し始めるのが「青年」であると同時に、拙稿(二〇〇八b)で着目した、節祭初日に新年の予祝を主な内容とする長大な唱え言を行なうマユンガナシ成員への参加が許されるのも「青年」からであった。さらに、米の収穫感謝儀礼である豊年祭の準備の時期と、マユンガナシのカンフツの練習開始時期は、次のよう重なつていた。

お米を収穫したらすぐ、カンフツを練習する。お米を収穫するまでは、絶対このカンフツをやらない。また(旧盆のある)旧の七月も絶対やらない。七月を出たらすぐ、もう八月いっぱい練習して、節祭の時はマユンガナシのカンフツをまらがいなく唱えていた。僕らの時代はみんな、早くカンフツ覚え

て、早くマウンガナシになってみたいという意志が皆にあった。(二〇〇八年七月、一九三六年生の男性に聞く)

このように、マウンガナシのカンフツの習得に励む時期に、豊年祭の歌を練習したのであるが、両者の習得の順序は次のようであったという。

カンフツがずーっと難しいから、これを覚えるのに「苦勞した。オーパンヤ(節祭の道歌)や、アガルカーラ(豊年祭の道歌)は、このカンフツを覚え終わってから覚えた。カンフツが一番最初。(二〇〇八年七月、一九三六年生の男性に聞く)

カンフツが「難しい」と言われることには、その長大さや内容の複雑さのほかに、カンフツが一人で唱えるものであるため、聞く人を前に終始間違いない唱えられるかどうかは本人のみにかかっているということも含まれているだろう。一方でイビニンジユの男性全員で歌う歌は、先輩達について歌えば儀礼過程を滞らせることはないのである。

さらに、マウンガナシのカンフツを覚え、マウンガナシとして節祭の過程を経験すると、他の儀礼の様式や儀礼における歌を覚えやすくなったという。

みんな、マウンガナシに立たれた方はほとんどおわかりです

よ。必ず、ムトゥヤーに帰るまでは、歌を歌う。豊年祭も同じ。歌は、少しのあれはちがいますけど。

カンフツを覚えた人は他の歌も覚えやすい。カンフツは、アガルカーラとも少し似ていますよ。(二〇〇八年七月、一九三六年生の男性に聞く)

各戸訪問を終え、「ステイバ (stida)」「と呼ばれる野原で夜を明かしたマウンガナシ成員達は、日の出の頃になると、夜明けの直前に成員をねぎらいに来たツカサを先頭に全員で歩きながら、太鼓と銅鑼に合わせて「オーパンヤジラバ」を歌い、成員の長を勤める「フームトゥ (大元, qumutu)」の家に向かう。フームトゥの家の庭に着くと、皆で円状に歩きながら「節ジラバ」を歌い、終わると座敷に上がって宴をもよおす。この一連の流れは、豊年祭の締めくくりと同じである。同様の過程はまた、節祭五日目の「神願い」の日にもある。夕方、六十歳以上の女性達が、農作物の神送りの祈願を終えたツカサを集落のはずれで迎え、ツカサを先頭に「ミルク節」を歌いながら公民館へ向かい、公民館の庭では皆で円状に歩きながら「節ジラバ」を歌って、公民館に入り宴をもよおす。

このように、川平の儀礼において多くの人が参加する豊年祭や節祭での、人々が儀礼の場所を移動する時の典型的な方法への理解は、マウンガナシ成員としての明け方の移動の経験がたすけるようである。

また、カンフツを覚えた人は他の歌も覚えやすいという点について、たとえばアガルカーラの次のような表現は、カンフツに出てくる表現と同様である。

粟ぬ穂ゆあわぬほゆ 作りていつく 拝みばどううが ならひしぬ花はなたらしう  
がまり 米ぬ穂ゆまいぬほゆ 作りてい 拝みばどう 山すだま 実ぬなり  
んぐと うがまり(粟の穂を作つて拝むと(見ると)なら石  
の花のように拝まれる 米の穂を作つて拝むと山数珠玉の実  
のように拝まれる)(外間・宮良編一九七九・二九二―三)

マユンガナシのカンフツにおいて作物の生長過程を予祝的に描写する箇所では、「イヌの毛、ネコの毛」のように新芽が出揃う、「ススキ、力芝草」のように丈夫に繁茂するなどの比喻表現が頻繁に出てくるが、そのなかでアガルカーラと同様の、粟についての「なら石の花のように」結実するようにと、稲についての「山数珠玉の実のように」結実するようにという表現がカンフツにも出てくるのである(川平村の歴史編纂委員会編一九七六・一一二・一一四)。こうした表現の類似をふまえて、「カンフツを覚えた人は他の歌も覚えやすい」と言われるのだらう。<sup>(28)</sup>

なお、拙稿(二〇〇八b)では、従来秘儀的とされてきたマユンガナシのカンフツが、実際はマユンガナシ成員の経験者やカンフツを聞く人々によって集落で広く共有されていると述べ

たが、さらに、今回見たようにマユンガナシのカンフツは、他の歌に先立って習得され、他の歌を覚えるときの知識上の拠り所とされていたことも伺われる。カンフツは人々の間で共有されることばであると同時に、一部の表現が他の歌と共通するものであることが分かる。

## (2) 二つのカンフツの対照性

このようなマユンガナシのカンフツは、同じく「カンフツ」と呼ばれる川平のもう一つの唱え言、三節で見たツカサによるカンフツと、様々な点で対照的である。マユンガナシのカンフツが集落の人々に様々なレベルで、様々な側面から共有されているのに対し、ツカサのカンフツについての知識と実践はツカサのみに限られている。ただ、「それまで方言を使えなかった人が、カミシ(神司、ツカサのこと)になると、(儀礼の場での敬語を多用する)方言も上手になる」と言われることがあり、ツカサのカンフツも、儀礼の場における発話という他のことばに近い部分をもつかもしれない。しかし、その当否はツカサ以外の人は知り得ない。川平におけるツカサのカンフツはあくまで、ツカサと神のみが知ることばとなっている。

## (3) 神への発話に見られる共通性

三節で見た、スーダイ長から参加者へと発せられる儀礼の場における発話には、神への祈願のことばでも頻繁に用いられる

定型句が入っていた。このように、儀礼の場における発話には、単なる敬語表現を超えた、独特の表現が見受けられる。たとえば、拙稿(二〇〇七)では、マユンガナシを迎える家の人からマユンガナシへの発話に、マユンガナシのカンフツの文句が部分的に引用されることを報告した。このように儀礼の場における発話は、儀礼の核心部分の周囲で発せられるという意味で境界上のことばであるだけでなく、その内容そのものも祈願を行なう方法としての唱え言と部分的に類似しながら日常的発話へも連続していくという、境界の性質をもつ。このような発話をめぐり、最後に二つの「人から神への発話」について見てみたい。

三節では、豊年祭の午後のプバナアギで、ツカサはカンフツを唱える以外にも、ミシヤグアギの始まりといった儀礼過程を、発話に近いと思われることばで神に報告する場面があった。このようなツカサから神への発話は、他の儀礼でも見られる。筆者はかつて、神に儀礼過程を伝えるのはなぜかを一人のツカサにたずねたことがある。すると、「ことばで言わないと、神さまは何も分からないから」との答えが返ってきた。<sup>(29)</sup>

もう一つは、先にもふれた、マユンガナシを迎える家の当主から、マユンガナシへの発話である。当主は、カンフツを唱える以外にはことばを話せず、また神としてのふるまいしかすることのできないマユンガナシに対し、不自由や不足がないように話しかけ、はたらきかけながらもてなし、神の身の回りを整える。<sup>(30)</sup>

以上からは、「もの言わない」神(マユンガナシ)、また「言わないと分からない」神という、人間がその場を共にするうえでは何らかのはたらきかけが必要な神という像がうかがいがつてくる。このような神に対して川平の人々は、厳しく定められた作法をもって敬い、まつると同時に、ことばで話しかけ、動作の面でも神の手助けをしながら、神にできないことや神に分からないことを補っていると言えるのではないだろうか。もちろん、実際には人が成り代わっているマユンガナシと、姿形をもたず、人々の観念のうえでのみ存在するオンの神との違いは大きく、これらの神々への対応の差異、特にそうした対応をとることになる動機については、引き続き慎重に検討しなければならぬ。はからずも二つの事例からうかんだ、人間からの具体的な配慮や手助けを多分に必要とするという神の像は、川平における他の事柄からも捉え得るのか、人々による神の認識の仕方の特徴と言えるのかどうか、今後も調査と考察を進めたい。

おわりに

石垣島川平の儀礼における歌、唱え言、発話が儀礼において継起するおおまかな様子を報告し、年間の儀礼における歌・唱え言・発話の一部についてそれら相互の関係をめぐり考察した。一つのことばが発せられるのは儀礼の一局面に過ぎないが、その一場面を成り立たせるためにはことばの背景としての習得過

程があり、その習得過程について探ると、また別のことばの背景の問題につながる。従来、儀礼におけることば、特に歌や唱え言の内容は人々の「世界観」などを語るものとして参照されることが多かったが、参照するにあたっては、そのことばを人々がどのように身につけ、どのように理解しているかという、人とことばの関わり様にも注意を払う必要があるのではないだろうか。

儀礼の場におけることばの記述方法については模索中の部分も多い。今後、記述の技術を改善しながら、川平の儀礼におけることばについて、習得と実践をめぐる人とことばの関わりを含めたその全体像を描くことを目指し、引き続き調査と考察を行ないたい。

## 注

- (1) 沖縄県教育庁文化課編『沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動』
- (2) 本稿において歌・唱え言・発話について用いる「ことば」には、それらを文字で記録され得る側面のみとしてではなく、声によって発せられる様態として捉え、かつ、音楽的側面よりも言語の側面に着目するという意味を込めている。
- (3) 日本音楽学における、「音節の引きのばし」と「言葉のふしまわし（本来の言語的抑揚とは異なる音調変化を伴う一定の抑揚をもつこと）」（平野一九八九・九四）の二つの指

標からみた歌と唱え言の特徴については、小島（一九九七・一一〇～一二六）を引用しながら、澤井（二〇〇八b・六七～八）に記した。

(4) 儀礼の場における発話については、澤井（二〇〇七）でも報告、検討している。その時点ではこの発話を人と人との間における発話に限ったが、本稿では儀礼の場において人から神に向けて発せられる発話も検討対象に含める。

(5) ここでいう「川平方言」とは川平で一九五〇年以前に生まれた人が流暢に操ることばとして川平の人が対象化するものだが、川平における一九五〇年前後の言語事情については今後確認を進めたい。

(6) なお後述のように川平の儀礼は主に稲作の過程に沿って行なわれるが、現在米を作る農家は川平に三～四軒で、作られている品種は、儀礼の暦が沿う明治時代頃まで盛んに作られていた品種とは異なるため、特に播種の時期について、儀礼と米作りの対応がなくなっている。

(7) 川平方言の音声表記にあたっては、外間ほか（一九七五）、西岡（二〇〇〇）、宮城（二〇〇三）を参考にしながら、調査に基づき行なった。母音の無声化の記号は省略した。今回はカタカナによる方言音の表記方法が不統一であり、今後改めたい。なお、川平方言が有する、石垣方言とは異なる特徴として、語頭母音がしばしば無声化して摩擦音を伴うこと（外間ほか一九七五・五）、「p」「k」「b」「g」

の後に中舌母音「i」が来るときは、摩擦性の「s」「z」が渡り音として聞かれること（西岡二〇〇〇・三三七）などがある。

(8) ツカサの選出の背景や就任過程については、澤井(二〇〇八 a)において報告、考察している。

(9) カンムトゥヤーは、オンの由来伝承において、オンの創設を中心的に担った家とされるが、川平ではカンムトゥヤーからツカサが輩出されるとは必ずしも限らない。

(10) ツカサや、体調の急変など個別の事情を契機に就任する女性神役の「ティナラビ（手並べ、tinabi）」は、当主の帰属が家の帰属として受け継がれていくイビニンジュとは異なる方法でオンに帰属する。

(11) マンガナシ成員とその唱え言については、澤井(二〇〇五・二〇〇八b)で論じている。

(12) 筆者は二〇〇〇年から、主に儀礼の前後五日〜四週間程度の滞在を繰り返すことにより川平の儀礼について調査を行っており、豊年祭の調査は二〇〇四年、二〇〇六年、二〇〇八年に行なっている。各オン及び川平全体の豊年祭の過程とそこであつられる神々については、別の機会に体系的に報告したい。

(13) スーダイやウヤジュウ達も、背広にネクタイやかりゆしウェア、紺地の着物などを身に着け、正装して朝参りに臨む。なお、供物の運搬などを行なうムラバサ達は作業しや

すい服装である。

(14) 儀礼の場における発話の事例は、別の機会に報告したい。

(15) ツカサから神への唱え言は、先行研究においては「ニガイフチイ（願い口）」（外間・宮良編一九七九・三五）や「願詞」（川平村の歴史編纂委員会編一九七六・九二）など、「願いの言葉」とされることが多いが、川平のツカサ達自身はこれを「カンフツ」と呼ぶ。一人のツカサ経験者（一九二五年生）によれば、「カンフツ」は集落単位の儀礼での神に関する唱え言を指し、「ニガイフツ」は個人で行なう儀礼（家の新築儀礼など）で唱えられる唱え言だという（二〇〇一年八月の調査による）。なお、ツカサのカンフツの唱え方と習得過程をめぐる詳細については、澤井(二〇〇八c)において報告、考察している。

(16) パカーラとは各オンの管轄地とされる泉、森、崎、小島などの小区画の土地の名で、祈願の冒頭には各土地に居る神の名を、それぞれのパカーラに「降りおる大親（降りなざる大親）」（外間・宮良編一九七九・三八）とつけるかたちで唱えあげていく。なお、同様の形式で神の名を挙げている唱え言は、竹富島や波照間島の女性神役も管掌しているようである（外間・宮良編一九七九・五九〜七〇、九一〜九六）。

(17) 豊年祭のカンフツは、その一部が外間・宮良編（一九七九・三五）などに記されている。ただ、これが朝参りのものか、

プバナアギのものかは不明である。

- (18) 男性によるバイの所作は、中澤(一九八七・二二九、二五〇)に記されている。

- (19) 本稿で挙げる儀礼の場における発話は、一九三六年生の男性のご教示によるもので、現在、方言の不得手な人が規範として習う対象としての発話と言える。この男性は一九六五年にムラブサを勤めた時に、スーダイの儀礼におけることば(「発話」)を、将来長男がスーダイを勤める時のためにノートに記録された。二〇〇八年三月、このノートに沿って同男性に発話を読み上げていただき、方言音や意味を把握したうえで、本稿では外間ほか(一九七五)、西岡(二〇〇〇、二〇〇六)、宮城(二〇〇三)を参照しながら音声表記を行ない意味を記した。

- (20) 筆者は二〇〇六年と二〇〇八年に、豊年祭午後のプバナアギの調査を群星オンにおいて行なっている。

- (21) ティナラビについては注(10)を参照。

- (22) ミシヤグアギの歌の歌詞は、譜も含めて他日報告したい。なお、沖縄県教育庁文化課編(一九八九・八〇〜八三三)にも同歌の詳細が記述されているが、男性によるフミシヤグの囃し句の分担が、筆者が調査で見聞したものと異なっている。

- (23) 「アガルカーラ」「チクデイスパツイムヌ」「ピキバ」の歌詞や歌に伴う儀礼的所作は、沖縄県教育庁文化課編

(一九八九・八三〜八六)などに記されている。

- (24) 以下は同女性から二〇〇八年三月に聞いた内容をまとめたものである。

- (25) 一九七九年に結成し二〇〇六年に解散した川平ジラバ保存会の沿革や活動内容などについては、別の機会に報告したい。なお、こうした保存会の結成からも分かるように、川平の儀礼におけることばのなかでも、歌の伝承は最も危ぶまれている領域である。以下、本稿で提示する歌の伝承の事例は、現在の一般的な例ではなく、昭和初期に生まれた人の若い頃の例である。

- (26) 二〇〇八年七月に一九三六年生の男性に聞く。なお、節祭の初日や五日目にも道歌が歌われる場面があるが、これらの歌は今日も儀礼準備の際に参加者全員で練習される。

- (27) 一九三六年生の男性によれば、青年会には中学を卒業してから入ったという。また『川平村の歴史』によれば、川平の青年会(第二次世界大戦前は「青年団」)の構成年齢は十六歳から二十一歳までとなっている(川平村の歴史編集委員会編一九七六・二〇〇)。

- (28) 永池は、唱え言の表現が対象に直接向かうのに対し、歌の表現はその場を共有する人及び森羅万象に向かって放たれると、両者の違いを指摘する(永池二〇〇三・一一八〜九)。川平における歌と唱え言の表現の違いについても、担い手がそれをどう捉えているかも含めて今後検討したい。

(29) 二〇〇七年十月の調査による。  
(30) その詳細は澤井(二〇〇五、二〇〇七)で述べている。

参考文献

- 沖縄県教育庁文化課編「第8節 石垣市川平のプリーイの神歌」  
『沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動(Ⅱ)』(沖縄県文化財調査報告書第91集) 一九八九 沖縄県教育委員会
- 川平村の歴史編纂委員会編『川平村の歴史』一九七六 川平公民館  
小島美子『音楽からみた日本人』(NHKライブラリー57) 一九九七 日本放送出版協会
- 澤井真代「石垣島川平 マユンガナシのカンフツに関する一考察——カンフツを聴く人の視点から——」『奄美沖縄民間芸学』第五号 二〇〇五
- 同「儀礼の場における発話——石垣島川平の事例——」『奄美沖縄民間芸学』第七号 二〇〇七
- 同「石垣島川平における女性神役『ツカサ』の就任過程——司祭者と神の関わり方の問題として——」『南島史学』第七一号 二〇〇八 a
- 同「ゆるやかな共有——石垣島川平の来訪神儀礼における『神口』——」『口承文芸研究』第三一号 二〇〇八 b
- 同「石垣島川平のツカサとカンフツ」『奄美沖縄民間芸学』第八号 二〇〇八 c
- 永池健二「ウタとトナエゴト——境界の言語表現——」『日本歌謡学』
- 会編『歌謡とは何か』(日本歌謡研究大成上巻) 二〇〇三 和泉書院
- 中澤章浩「石垣島の川平のプー」高阪薫編『沖縄の祭祀——事例と課題』一九八七 三弥井書店
- 西岡敏「石垣島北部方言の体言基礎語彙」『琉球の方言』二四号 二〇〇〇 法政大学沖縄文化研究所
- 同「石垣方言の敬語概略」沖縄国際大学南島文化研究所編『八重山の地域性』(南島文化研究所叢書1) 二〇〇六 編集工房東洋企画
- 波照間永吉「沖縄八重山の祭祀歌謡」『沖縄文化研究』二〇号 一九九三 法政大学沖縄文化研究所
- 同「祭祀と歌謡——八重山」『琉球文学、沖縄の文学』(岩波講座日本文学史第一五巻) 一九九六 岩波書店
- 平野健次「歌」平野健次他監修『日本音楽大事典』一九八九 平凡社
- 外間守善ほか「琉球の方言 八重山石垣島川平方言」一九七五 法政大学沖縄文化研究所
- 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成(Ⅳ八重山篇)』一九七九 角川書店
- 宮城信勇『石垣方言辞典』二〇〇三 沖縄タイムス社
- 〔付記〕 本稿のもととなる調査の一部は、平成二十年度笹川科学研究助成により行なった。
- (さわい・まよ／総合研究大学院大学博士後期課程)